Generativity seen from the perspective in four generations of women: The narratives of middle- aged women with daughters
2018 Vol.20 p.21 - p.32

女性４世代のかかわりからみた世代性
:娘を持つ中年女性のナラティブから

武正　千秋　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科

要約
本研究は，娘を持つ中年女性の語りから，女性４世代の世代性を考察したものである。先行研究の多くは，３世代を親子関係の重なりとみなし，その重なりから世代性の研究を行っている。しかし，世代性の循環という観点からは，多くの世代の重なり，その連続から世代性をとらえる必要がある。本研究の目的は，かつて育てられた者がどのような世代性を受け，何を次世代に受け継ぎたいと思うに至るか，そのプロセスを明らかにすることである。調査対象者は，自らも「世代性」という発達課題に直面している，娘を持つ中年女性である。調査方法は半構造化面接法とした。分析方法には，グラウンデッドセオリー法を用いた。その結果，世代性を受け継ぐプロセスにおいて対象者は，世代性の持つ普遍的側面と個別的側面を受け継ぐことが示され，そして，世代性を繋ぐプロセスにおいては，個人のライフサイクルにおける自らの経験を，世代間サイクルにおける経験に置き換えることが示唆された。また，2 つのプロセスの移行期には，「母親」のアイデンティティにかかわる経験が起こり，このような経験を経て，対象者は次世代に継承すべきものとして，「愛」，「体」，「作業」を挙げることに至ると推察される。
キー・ワード:世代性，プロセス，ライフサイクル，ナラティブアプローチ，アイデンティティ

Ⅰ　問題と目的

平均寿命の延びに伴う高齢化社会の到来は，世代間の関係性にも大きく影響する。たとえば，中年期における発達課題である「世代性」が，高齢期においても重要な発達課題であり（Cheng，2009），晩婚化により高齢期になっても，親役割が終了しない傾向が顕著である。このように一つの世代の発達課題が，複数の世代にまたがって存在することは，世代間の関係性の複雑化が懸念され，藤崎（2000），樋口（2007）は“親子関係の長期化・重層化・累積化”と論じている。

世代の関係性を考えたとき，その最も原初的側面は，命をつなぐということである。そして，受けついだ命を「育てる―育てられる」という営みを通じ，隣り合う複数の世代が結び付けられている（鯨岡, 2010）。したがって，昨今の社会情勢を鑑みたとき，この「育てる―育てられる」関係の「循環性」を考えることが，非常に重要になってくる。養育をめぐる世代間の循環性を考察するにあたり，多くの示唆を与えるものが，「育てる」「はぐくむ」「世話」をその概念の中に含む「世代性（Generativity）」（Erikson, 1964/1971）である。

Erikson は，自身のライフサイクル論（1982/2001）の中で，“「自己完結性」を持つ個人のライフサイクルと，「世代連鎖性」のライフサイクルとを結びつけるものが，「世代性」である。”と述べているが，「世代性（Generativity）」という用語自体，generation（世代）と generate（生み出す）とを掛け合わせた Erikson の造語で，子孫を生み出すこと，生産性，創造性といった概念を包含する（Erikson，1950/1977）。

このような多義的な「世代性」の概念を整理したのは，McAdams & Aubin（1992）である。彼らは，世代性の動機づけとして，内的希求（個人の内面を突き動かす強い希求性）と文化的要請（個人が期待される社会貢献や社会的責任）を示し，これらに動機づけられ，世代性の関心が喚起させられる概念モデルを作った。これにより，「生殖性」

の側面に偏りがちであった世代性研究が大きく躍進したといわれる（田渕，2010）。

その後新しい理論を展開させたのは，Bradlry&Marcia（1998）である。彼らは，中高年者の世代性の意識や態度を，自己に向いているか，他者に向いているかで，関心と行動を基準に 5 つのタイプに分類した。

本邦における世代性の研究は，欧米に比べ少なく，丸島（2005）は McAdamset al.(1992)の概念モデルをもとに，日本語版世代性関心尺度を，その後，本邦の文化的背景を考慮した質問項目を追加して，改訂版世代性関心尺度を作成した（丸島・有光，2007）。

堀毛（2008）は丸島ら（2007）の尺度を用いて中高年者の世代性を測定し，世代性は中年期よりも高齢期に高くなると報告している。

串崎（2005a，2005b）は，次世代を育みたいという広義な世代性が，思春期にはすでに存在しているとして，次世代育成尺度を作成した。

世代性研究の中でも，母子関係に着目した研究を，やまだ（1988）がイメージ画を用いて行い，西山（2011）は，同じくイメージ画を用いて，配置に現れる祖母，母，娘の 3 者関係から世代性研究を行っている。先行研究の多くが，1 個人の世代性に焦点を当てているのに比べ，複数の世代の関係から世代性の生成を考察したところは極めて意義深いといえる。しかし，世代の関係から継承される世代性は，単に養育行動だけを指すのではなく，「家族を養う，世話する」など家庭生活全般に及ぶと考えられる。

また，先行研究の多くは，1 つの時点からの調査にとどまる。前掲の西山（2011）の研究は，幼少期，現在，未来と 3 時点をもうけているが，対象者を娘世代としているため，世代性の受け手としてのプロセスにとどまり，世代性を発揮する，繋ぎ手としてのプロセスがわからない。世代の循環性を考察するには，この受け手と繋ぎ手双方のプロセスを丁寧に見ていく必要があると考える。

このような，受け手あるいは繋ぎ手となった個人の体験プロセスには，その個人の環境からの影響が予想されるが，この点につき McAdams et al. は次のように論じている。“世代性は，個人の置かれた社会的・歴史的文脈により，固有の様式を見せ（McAdams, Aubin & Logan , 1993）”，“その固有の様式は，個人の把握や構成の仕方すなわち物語られ方に現れる（McAdams et al., 1992）”。

これらを総括して本研究の目的を述べる。本研究は先行研究で見られた祖母・母・娘の 3 世代を 4 世代に広げ，世代性という発達課題に直面している中年女性を中心として，世代の重なりから世代性を考察しようというものである。

2 つの 3 世代を設定することにより，前者で対象者の，世代性の受け手としてのプロセスを，後者で，世代性の繋ぎ手としてのプロセスを考察する。また受け手から繋ぎ手に至る，移行期にはどのような個人的体験があり，それが世代性に，どのような影響を及ぼすのかを考察したいと考える。

育てられた者が，複数の世代の関係性の質やそれぞれの養育環境の中で，どのような世代性を受け，長い時間を経て，何を次世代に受け継ぎたいと思うに至るか，それをプロセスとして捉えなおすことが本研究の目的である。

そのプロセスは，幼少期から中年期までであり，およそ人生の半分にあたる。長期時間枠の中で，受け継いだ世代性を，今度は継ぐべき世代性として構築しなおす行程を経ることが推察される。したがって前述の McAdams et al.の指摘に倣い本研究の調査方法としてはナラティブアプローチが妥当であると考えられる。

さらに本研究は，世代性という概念の中核をなす，養育性に着目した研究であるが，単なる養育行動にとどまらず，家庭生活全般を視野に入れた，世代性を探索するところに本研究の独自性がある。

ここで，本研究で明らかにする世代性の定義を明確にしておきたい。岡本（2007）は Erikson の Generativity を，「世代性」と訳し，“達成された

自らのアイデンティティでもって，他者を支え育てること”と定義している。本研究ではこれに準じることとする。

この定義に従えば,「世代性」が達成されるための特質として,“①他者へのアイデンティティの投企（確立されたアイデンティティでもって他者へコミットすること）②無我性（自己中心的ではない他者への関心と関与)”が不可欠の要素として挙げられる（岡本，2007)。

Ⅱ　方法

1. 予備調査

平成27年５月,都内公共施設や筆者自宅にて,50代の中年女性２人を調査対象者とし,娘の子育てをめぐる母，対象者，娘３世代のかかわりを中心に，聞き取り調査を実施した。母は 70 代後半から 80 代であり，娘は 10 代後半から 20 代前半であった。

2. 本調査に向けての再検討

予備調査において，調査対象者の記憶に曖昧さが見られた。またインタビュー中，対象者の母親の呼称が，統一されていなかったため，確認をした場面が頻繁にあった。これらの問題点を踏まえ，本調査では，対象者の記憶の想起を助け，逐語の内容を明確にするため，事前にイメージ画を作成させた。そして，それらをインタビューガイドの補助として使用した。

3. 本調査

1）調査時期

平成 27 年５月から 11 月まで行った。

2）調査場所

筆者自宅や大学構内，都内近郊の公共施設であった。

3）調査対象者

中年期の女性８人であった。年齢層の内訳は 40 代３人，50 代５人であった。職業は，公務員１人、小学校非常勤講師１人,学習塾講師１人，自営業１人，無職（専業主婦）４人であった。都内近郊の地方都市に在住するものが３人，都市部に在住するものは５人であった。対象者の母親は 60 代１人，70 代４人，80 代３人であった。職業は，茶道教室教授１人，パート従業員１人，無職（専業主婦）６人であった。また，娘の年齢層は，10 代 ２人，20 代６人であった。職業はいずれも大学生である。次に対象者のうち，幼少期に祖母と同居をしていたものは１人であり，７人は別居であった。現在母と同居をしている対象者は１人であり，７人は別居であった。

4）調査時間

１人当たりおおよそ60分から100分を要した。

5）研究の説明および倫理的配慮

調査実施に当たっては研究の趣旨，プライバシーの保護，倫理面の配慮について十分な説明を行い了解を得た。

表１　インタビューガイド

領域	知りたい事柄	具体的な質問
描画	描いているときの感情，気づき	●描いてみていかがでしたか？
		●何か気づいたことはありますか？
幼少期，思春期	記憶の中の３者の関係性	●おばあさんはどんな方でしたか？思い出，やってもらったこと，言われたこと
		●３人での思い出のエピソード
		●思春期や娘時代，あなたと祖母，あなたと母親の関係は幼少期と比べ変わりましたか？
娘が生まれて母となる	自分にとって母親はどんな存在になったか	●出産してあなたとお母さんとの関係で最も変わったことは？
	娘と自分の母親との関係性	●娘と自分の母親とのかかわりはどんなかかわりか？
	子育てのやり方は継承していくか	●自分の子育てで「母親と同じことをしている」と感じたことは？
	受け継ぎたくないものは	●子育てを手伝ってもらい困ったこと，自分と違うと感じたことは？
娘が成人期となった	母子３世代への意識	●子育ても一段落，われら３世代という思いはありますか？
	子育てから介護の移行時期	●自分の時間が持てて思うこと
		●今度はお母さんを世話する立場，娘さんはどのように思っていますか？
将来の自分たち	受け継いでいくもの，あなたが手にしたもの	●娘に子供が生まれたらと想像することはどんな場合？
		●自分が娘に受け継ぎたいもの　自分も受け継いだものは？
		●あなたの子育てと共にあったものは？

6）調査手順

まず，対象者には事前にイメージ画を作成してもらう。イメージする時期は，対象者の幼少期，娘の幼少期，現在，未来である。イメージする内容は，対象者と母親および娘，3 者のかかわりについてである。対象者が幼少の時期については，対象者の祖母と母親，そして，対象者とのかかわりについてのイメージを，描画してもらう。補足の説明文は，自由記述であり，記述があった場合には，語りに含むものとする。用いる筆記具は自由であり，彩色も対象者の自由裁量とした。描き終わった画は，面接開始前に回収し，描かれた時期や場面に沿って，インタビューガイド（表 1）をもとに半構造化面接を実施した。

4. 分析

逐語録を作成しグラウンデッドセオリー法（Strauss&Corbin, 1990）に則り分析を行った。

Ⅲ　結果

1. カテゴリーと概念図

分析の結果, 5 の上位カテゴリーと 11 の中位カテゴリー，27 の下位カテゴリーを得た。表 2 は上位カテゴリーと中位カテゴリー，および下位カテゴリーにコードの数を対応させたものである。これをもとに作成した概念図,「世代のかかわりからみた個人の体験プロセス」を図 1 に示す。

表２　上位カテゴリー，中位カテゴリー，下位カテゴリー，下位カテゴリーコード数

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	コードの数
依存と黙従	いたたまれない	期待されていないと感じる	4
		あきらめる方が楽	3
		複雑な関係性の中で育つ	4
		痛みを抱える	6
	心の拠り所	安心感に包まれている	3
		絶対的存在	3
波動	動と静	外へ向かう変化	4
		内側に向かう変化	3
		秘めていた思い	3
胎動	母性が育つ器	子育ての環境を用意してもらった	5
		子育てで母と過去を共有する	1
		安心して母親になっていく	4
	世代の力動	関係が緊密になる	5
		休みなく流れ続ける	2
		重なる	2
		関係のねじれ	3
		異分子外し	2
	女性性	女として連なるということ	6
	生のほとばしり	生のほとばしり	6
誕生	私はここにいるという体験	母との対決	2
		私にしかできないこと	4
		関係性の中で自分の立ち位置を知る	3
宝	作業	それぞれが負うべき仕事	2
		手を使った暮らし	2
	DNA	DNA	2
	愛とエネルギー	慈愛	5
		生きたいという欲求	2

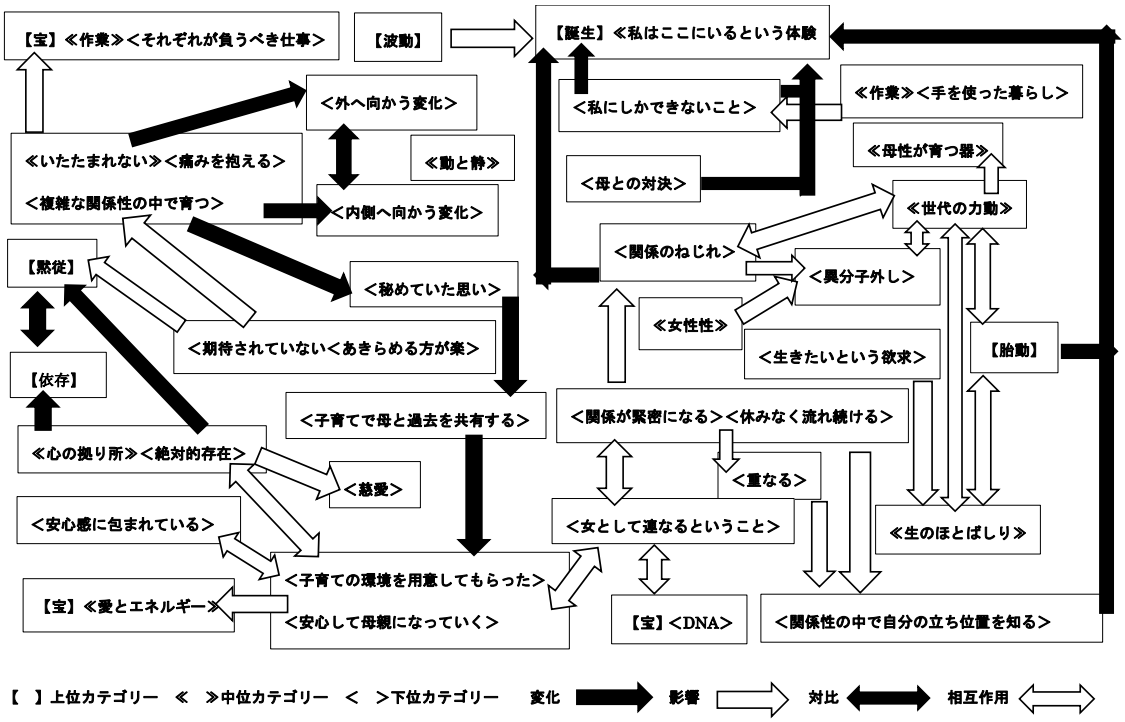

図１　世代のかかわりからみた個人の体験プロセス

2. 全体像としてのストーリーライン

生成されたカテゴリーと，それらの関連による個人の体験プロセスの概念図を，以下に示すストーリーラインにまとめた。なお，上位カテゴリーは【　】，中位カテゴリーは≪　≫，下位カテゴリー＜　＞で示した。また，対象者を「私」に置き換えた。

幼少期には，母や祖母とのかかわり，自身の養育環境から様々な語りが見られた。

＜絶対的な存在＞である母や祖母に，≪心の拠り所≫として【依存】しながらも，いち早く＜期待されていないと感じる＞察知や，同胞のうち自分だけ厳しく当たられたことで＜あきらめる方が楽＞と達観をしていた。

また，祖母の生い立ちは，＜複雑な関係性の中で育つ＞ことを意識させ，それは時として＜痛みを抱える＞こととなった。また，＜絶対的存在＞は＜安心感に包まれている＞感覚を与える一方で，不動の存在であり，子どもの無力感から何とかしたいけれどもできない，≪いたたまれない≫気持ちで環境に【黙従】していた。

そのような中から，思春期や青年期を迎える時期に，変化が起こってくる。訳もなくすべてのことが気に食わないで，母や祖母に反抗したり，実際に家を飛び出したり，または，周囲の評価で自信をつけ，自分が出せるようになる。これらの変化は＜外へ向かう変化＞である。＜内側に向かう変化＞もあり、これは気づきと呼べるものである。生活するということが，いかに大変なことかわかったり、母の真意に気づいたりしている。

このように，この時期の変化というのは≪動と静≫の対比がある。しかも，変化は，これだけでは終わらず，後で起きる出来事にその【波動】を伝え，後の出来事では振り返りの語りが見られた。特に＜秘めていた思い＞は後の体験と対にして語られた。

やがて，結婚・出産を経験する。母親に娘の養育を手伝ってもらうことで，一気に接触が多くなる時期である。より良い＜子育ての環境を用意してもらった＞ことを感謝し，＜子育てで母と過去を共有する＞ことでわだかまりをなくしたり，進歩を感じていた。中には，まだ祖母が健在の場合もあり，このような世代のつながりを≪母性が育つ器≫のように感じ，ここで＜安心して母親になっていく＞安堵感を述べた。

しかし，この時期は母世代も子育てを終えておらず, 世代間で子育てが＜休みなく流れ続ける＞。親子ゆえに＜重なる＞感じは，＜関係が緊密になる＞と＜関係のねじれ＞や＜異分子外し＞を招く。この時期に≪世代の力動≫が活発化している様子がわかる。

また，各世代が≪女性性≫で連なることは，連帯意識を高める。しかし，この時期の祖母力のバイタリティーは，≪生のほとばしり≫のように映っている。養育者の役割が段々と板につき，世代交代も予想させる【胎動】の時期である。

次は，子育ての中で悩み，迷い≪私はここにいるという体験≫をする時期である。＜母との対決＞は，ある意味，娘時代との決別でもある。＜私にしかできないこと＞は「母親」としての覚悟を迫られていた。＜関係性の中で自分の立ち位置を知る＞ことも各世代のかかわりの中で自分の存在意義に触れる体験であった。それは，新しい私の【誕生】である。

将来，次世代に受けつぎたいと思っているものとして, ≪作業≫にかかわることや, ≪DNA≫ ，≪愛とエネルギー≫に関連したことを挙げた。祖母や母からは，人には，＜それぞれが負うべき仕事＞があり，＜手を使った暮らし＞は身を助けることを教えられ，＜慈愛＞や前向きさ，＜生きたいという欲求＞を学んだと述べた。

＜DNA＞は, 我が身の根底に流れている血筋を客観的にとらえ，元々の性格や癖が似てきたことに母や祖母との繋がりを感じていた。そして，これらはすべて，現在の私を形作っているものとして，かけがえのない【宝】としていた。

3. 世代のかかわりからみた個人の体験プロセス

ここでは，図 1 で示した世代のかかわりからみた個人の体験プロセスを，2 期に分け前半を世代性の受け手としてのプロセス，後半を世代性の繋ぎ手としてのプロセスとし，それぞれの行程を，各カテゴリーの定義に触れながら詳述した。カテゴリーを使用した場合には，上位カテゴリーは【　】, 中位カテゴリーは≪　≫, 下位カテゴリーを＜　＞で示した。なお，語尾の変化が必要な場合は（　）にて筆者が補い，対象者を「私」とした。

1）世代性の受け手としてのプロセス

この時期は,【依存】,【黙従】,【波動】というカテゴリーで纏められる領域であり，およそ図の左半分にあたる。個人ライフサイクルで言えば，幼少期から思春期および前青年期である。

この時期は一様に，母や祖母に背負われた記憶や，守られているという感覚を持っており＜安心感に包まれた(ている)＞幼少期を送っていた。

母や祖母の存在はいつも変わらず，絶対的な≪心の拠り所≫になる一方で、その絶対性ゆえに，評価は気がかりになる。劣等感や罪悪感を感じたり，兄妹による扱われ方の格差は，私には虐げられたと映り，＜あきらめ(る方が楽)＞の気持ちへと変わっていった。

特に，自分の養育をめぐる母と祖母の意見の食い違いや，大家族の中での軋轢，母親の苦境は，痛みを伴うものであった。子どもの無力感ゆえ，居るには忍びないが居るしかない状況を表すカテゴリーとして，≪いたたまれない≫とした。

ここで特出すべきは，下位カテゴリーのコード数である。≪心の拠り所≫の下位カテゴリーである，＜安心感に包まれている＞，＜絶対的存在＞はいずれもコード数が 3 であるが，語りはどれも

これらのコード内に分類されるものであった。一方，≪いたたまれない≫の下位カテゴリーである＜期待されていないと感じる＞，＜あきらめる方が楽＞，＜複雑な関係性の中で育つ＞，＜痛みを抱える＞は，それぞれの養育環境により，多種のコードを内包しその数も多い。

したがって，このような養育環境は，養育を与えてくれる世代を≪心の拠り所≫とし【依存】しながらも，≪いたたまれなさ（い）≫を感じつつ，従っているとして，【黙従】と表した。

このような中から，思春期以降変化が起こってくる。＜外へ向かう変化＞ならば，母や祖母の評価ではない，世間の評価を知って，自分が出せるようになる。また，すべてが気に食わず家族との会話を避け，家を飛び出すなど，実際に自分が起こす行動がある。兄の独立をきっかけに，母親との会話を始まったなども，環境が変わったために起こる変化である。＜内側へ向かう変化＞は，祖母や母への客観的視点である。例えば，絶対的だと思っていた祖母や母にも，弱点があるとわかったり，母親は，愛情表現が苦手で私が疎ましいわけではないと納得している。また，生活していくことの苦労を知って生活者の視点から母や祖母との関係をとらえられるようになったことも気づきといえる。＜秘めていた思い＞は，母や祖母の置かれた状況や苦労を考えると，我慢せざるを得なかった，反抗してみたかったけどできなかった，という思いである。後で展開される体験を含蓄して，反抗期が遅くやってきた，と関連づける語りもあった。

また中には，思春期，前青年期，母や祖母とのかかわりについては，語るべき事柄が無いという場合もあった。

したがって，これらの変化の質的な相違から，中位カテゴリーを≪動と静≫とした。さらに，これらの変化は，後で展開される母，私，娘の関係性の変化にも影響を及ぼした。そのため目に見えず，変化の予兆を伝えるものとして，【波動】という概念を上位カテゴリーにおいた。

2）世代性の繋ぎ手としてのプロセス

この時期は，【胎動】，【誕生】，【宝】から派生する領域である。図 1 の右半分にあたるが，【宝】は左の領域に関連付けて示されている。個人のライフサイクルでは，配偶者を得てから中年期を迎えた現在までである。実際に，養育性を発揮している時期であり，娘世代の成長により自身の子育てを振り返っている時代といえる。

娘が幼少の頃は祖母が健在な場合もあり，頼りがいのある母と祖母で，我が家を丸ごと包み，時には娘にとって怖い存在でいてくれたことで，＜安心して母親になっていく＞。また，結婚後も仕事を続けていた者には，預かってもらえたからこそ，仕事が継続できたのであり，＜子育ての環境を用意してもらった＞ことへの感謝が多く述べられた。子育てを通じて母親と苦労を分け合う中には，過去に一度遭遇した場面もあり，母親が発した言葉から，過去の母親の本当の気持ちを知る経験もしていた。

このように，養育が母親と過去を共有する場になっていること，母親になるのにふさわしい環境，包み込まれて母親になれる実感を≪母性が育つ器≫とした。

しかし，子育てを手伝う母親自身もまだ，子育てが終わっておらず，他の姉妹が母親に養育を依頼する場合もあった。さらには私自身にも，第 2 子が生まれる場合もあった。このような状況では，実家と我が家との境界が薄くなり，どこかで必ず子育てが＜休みなく流れ続け（る）＞，四六時中，私と娘が母親とセットでいるため＜関係が緊密になり（る）＞，隙間のなさを感じるようになっていった。また，親子ゆえに考え方や子どもへの接し方が似ており，その＜重なり（る）＞が関係性をさらに密にしていった。

次第に役割の境界も緩みだし，娘を母にあてがったり，役割の逆転という＜関係のねじれ＞が起こる。特に母親と私，娘の結びつきが強い場合に

は，夫を外す＜異分子外し＞という形で現れた。

この時期は育てられる娘と，育てる私，母親の養育性が，ダイナミックに動き混じり合って，各世代が養育という目的のために，突き動かされていく時期であった。この時期の世代の関係性の質をとらえる概念として，カテゴリーを≪世代の力動≫とした。前述の＜異分子外し＞も，≪世代の力動≫に≪女性性≫が加わり負に働いたものであり，子育てが女性のみで完結してしまう後悔が語られた。

しかし一方では，≪女性性≫＝＜女として連なるということ＞に肯定的な意味づけが多くみられた。世代性の受け手の段階では意識されない，≪女性性≫が繋ぎ手になると意識されるようになり，コード数も６と多い。

その上，母親世代も女性としてまだ若く，バイタリティーにあふれ，向上心から私や娘に過剰な期待をかけたり，娘を溺愛することもあった。活性化したエネルギーをあらわす概念を≪生のほとばしり≫とした。

これまでみてきたように，＜女性として連なる（ということ）＞各世代は，新しく「母親」になった私に働きかけ，あたかも次世代の「母親」を生み出す，子宮のように機能する。このような働きから，≪母性が育つ器≫，≪世代の力動≫，≪女性性≫，≪生のほとばしり≫を総括させるカテゴリーとして【胎動】とつけた。

【胎動】は新しい「母親」を生むだけではなく，関係性も収縮させ，私の内的体験を促す。きっかけは，娘の虚言癖や不登校，反抗期の長引き，夫の不貞など様々であるが，過去に未解決な問題が，娘の子育てにも影響していたことに気づいた私は，＜母と(の)対決＞したり，また，養育の主導は自分にあると気づき＜母親(私)にしかできないこと＞をやり遂げ，自信を取り戻す経験をする。さらには，祖母と母，自分そして娘というつながりを振り返り，自分は祖母や母がやってきた養育の継承者であると自覚する＜関係性の中で自分の立ち位置を知る＞経験も，ここでの内的経験に含まれる。これらの語りはいずれも，「母親」の決断と覚悟をにじませるものであった。

ここで注目すべきは，世代性の受け手の段階でみた≪動と静≫の変化からの【波動】である。思春期や前青年期の，個としての変化を経験して，その変化が，母世代と共有できていた場合は，葛藤や模索のない，＜私にしかできないこと＞や＜関係性の中で自分の立ち位置を知る＞経験をしたのに対し，＜秘めていた思い＞を持つ者，思春期や前青年期，母や祖母とのかかわりについて，語るべき内容がないと答えた者，また，変化の経験が個人の経験内にとどまり，母世代に伝わっていない場合には，大きな葛藤体験として語られたことである。

つまり，母親自身も迷い，反抗や反乱に付き合い，変化を２人で共有できたと認識できている場合，あるいは，内的気づきであっても，母親が私の気づきの経験を察知しており，互いにそのことを共有できたと，語りの中で語られた場合は葛藤のない内的経験であった。

このような，世代性の受け手の【波動】から影響を受けた，繋ぎ手としての経験を，≪私はここにいるという体験≫と名付け，新しい個の【誕生】というカテゴリーで，一連の変化を纏めた。

【誕生】を経験した私は，娘世代に引き継ぎたいものとして，真っ先に＜慈愛＞を挙げた。それは単に親子関係にとどまらず，弱者に手を差し伸べる力，賢く生きるための愛と語った。また，老年期になっても前向きな母の姿から，＜生きたいという欲求＞のポジティブな面を手本にしたいと感じていた。

そして何よりも，今，自分があるのは，母が自分を生んでくれたからであると，血のつながりに思いをはせた。母と同じ要領で家事をする繋がりを感じ，仕事を負う幸せに気づき，幼少期は母の労働に心を痛めたが，労働があって母は幸せだったのだ，と振り返った。

祖母や母から受け継いだものについて，唯一無二の稀少さから【宝】を上位カテゴリーとし，＜それぞれが負うべき仕事＞がある幸福を≪作業≫，体や血のつながりを≪DNA≫，＜慈愛＞と＜生きたいという欲求＞を合わせて，≪愛とエネルギー≫と纏めた。

Ⅳ　考察

世代性の受け手としてのプロセスは，複数の世代から，世話や愛情といった養育性を甘受しながらも，自身の置かれた養育環境や各世代の関係性から，自身が受ける世代性の特質を意識し社会との比較を通して，その特質を自身の人生に意味づけるプロセスと推察される。この一連の流れは，個人のライフサイクルにおいて経験される。

一方世代性の繋ぎ手のプロセスとは，養育される者，養育する者，養育しながら技術や知恵をつなげる者とが，同じ養育行動という目標のために，一時同じ時間を共有する，世代間サイクルにおいて経験される。

したがって，繋ぎ手のプロセスとは，繋ぎ手が，個人のサイクルでの受け手と繋ぎ手双方の経験を合わせ，世代間サイクルでの経験に互換させることと推察される。

本研究では，受け手が，最も養育性を受けた幼少期に，安心感に守られ，祖母や母の存在に依存しながら，成長していった過程が語られた。このような愛情を，世代性の普遍的側面とするならば，自身の置かれた環境や，複数の世代のかかわりからは多くの特質が挙げられ，これを世代性の個別的側面と捉えることもできうる。

幼少期はこのような世代性の持つ個別的側面に，黙従するだけだったが，思春期や前青年期においては，個人の特質に応じた変化という形で対応している。

これらの変化は，繋ぎ手のプロセスにおいて通過する，「母親」としての個の経験に影響を及ぼすことが示され，変化の時に，母親が応答性を持っていることが，その後の繋ぎ手のプロセスの通過には重要であることが示唆された。

このような応答性は，一方では本研究にもみられたように，思春期の娘の心理的危機に連動して起こった，「母親」の個としての体験とも考えられ，丸島ら（丸山他，1998）（丸山，2000）は Erikson の「世代性」の概念に触れたうえで，“中年期の親の心理社会的危機は青年期の子どもとの相互性がある”と述べ，一ノ瀬（1999）も，娘が自己の確立を探る中，母親にも個としての自立を求め，母親もそれに応じることで自分を見つめなおし，中年期の危機を乗り越えた研究事例を挙げている。

思春期，前青年期における個人的変化を，アイデンティティの確立と仮定するならば，世代性の繋ぎ手のプロセスにおける，個の体験を「母親」としてのアイデンティティ確立と仮定することもできうる。

岡本（1994）はアイデンティティ達成の課題は青年期に限らず生涯を通して繰り返し再体制化されるものであること，親の役割に基づく中年期の発達課題の達成はアイデンティティの達成と関係していることを指摘している。

Erikson の定義（1982/2001）に従えば，本研究において考察された，繋ぎ手のプロセスにおける，「母親」としての個の経験が，個人のライフサイクルと世代間のライフサイクルを結びつける，「世代性」の経験である可能性が示され，さらに「世代性」の生成には，個人のライフサイクルにおける個の経験を，隣り合う世代が連動して経験し，世代間サイクルにおける複数の世代の経験に置き換える必要性が示唆された。

西平（2014）は Erikson（1982/2001）が，「世代性」を世代と世代の関係であると指摘したことを挙げ，中年期の発達課題である“「世代性」とは，前世代から引き継ぐだけでなく，世代間サイクルの中で世代生成をすることである”と述べている。

したがって本研究における，「母親」のアイデンティティ達成の経過を Bradley&Marcia（1998）

による「世代性」の 5 タイプから考察した場合，「世代性」の意識や態度が，個に傾倒しつつも（“個体性”）他者に向く“関係性”との間を行きつ戻りつし，アイデンティティにかかわる行動に移行したことで，“紋切り型”・“非個性型”を回避し，“停滞性”に至らず「世代性」の達成が可能になったと推察できる。

さらに一連の経過は，岡本（2007）が世代性の達成には不可欠と定義した“①他者へのアイデンティティの投企（確立されたアイデンティティでもって他者へコミットすること）②無我性（自己中心的ではない他者への関心と関与）”と極めて近しい経験であることが示された。

しかし，思春期・前青年期のアイデンティティの確立が「親離れ」の文脈で論じられるのと違い，中年期のアイデンティティ確立は，対象者が，受け継いだ世代性を「宝」と評したように，世代間を結びつける機能があると考察できる。Sullivan&Sullivan（1980）は，アイデンティティ確立は，単に親から精神的・物理的に離れることではなく，親との関係において愛情・相互交渉・満足感を経験することで，より独立性を増すとしている。

また，McAdams et al.（1993）が指摘したように，世代性の受け手と繋ぎ手のプロセスにおいては，個人固有の様式がみられた。受け手のプロセスでは，幼少期における，祖母，母の関係性や，自身の養育環境において顕著であり，繋ぎ手のプロセスでは，娘を育てる過程で，母，私，娘の関係性のあり方をめぐり様々な様式がみられた。

しかし，McAdams et al.（1993）の主張には 2 通りの考え方が可能である。つまり，複数の世代が合わさり養育行動を通じて世代性が継承していく，世代間サイクルにおける世代性が，社会的・歴史的文脈の影響を受けるのか，個人がそれぞれの時代や社会を生き，そこで構築された世代性を持ちより相互に影響を及ぼしながら関係性が作られている，個人サイクルにおける世代性が，影響を受けるのかである。祖母世代は全員が戦争経験者であり，戦前と戦後では人々のイデオロギーは大きく変換した。したがって，受け手のプロセスにおいては，個人サイクルにおける世代性が，歴史的文脈から影響を受けたことが推察される。加えて，地方に在住する対象者では，本邦に特徴的な，家制度に関連した語りが多く抽出され，地域による文化的文脈の影響が示唆された。

一方，世代性の繋ぎ手のプロセスにおいては，現代の高齢化社会に特徴的な影響を受けていると推察される。つまり昔であれば，隠居の年齢である母世代がエネルギッシュに動き，養育行動を支える資源になっているという点である。これらは，世代間サイクルにおける世代性が，社会的な文脈から影響を受けた例と考察される。

また，やまだ（1988）は，“つつむ”，“守る”，“入れる”といった構図に見られる母性的な概念に着目しているが，本研究における語りにも，共通の概念がみられた。幼少期には「安心感に包まれている」というカテゴリーが，幼い娘を育てる時期には，「母性が育つ器」といったカテゴリーが抽出でき，このカテゴリーは「実家が我が家を丸ごと包む」というコードを含んでいる。

これらのカテゴリーやコードを比較すると，幼少期では「包まれている」のは個人である。養育者となってからは，「包まれている」のは複数の世代が集う家族であり，その幼子は家族に包まれるという，入れ子の構図を成す。

世代の関係性の最も原初的側面を，命の連鎖とするなら，これらの構図は，その連鎖の本質を端的に表していると考察される。

最後に本研究の問題点を述べる。本研究の目的に照らし合わせれば，調査対象は母系 4 世代が望ましい。しかし本研究においては，父方の祖母と同居していた対象者が 1 名おり，その場合も調査の対象に含んでいる。そのため，データに均一性が確保されていないことが問題点として挙げられる。

「生殖」という概念を有する「世代性」は，血縁関係にある世代間でより緊密になることが推察され，父方，母方などの続柄による親密度の違いを，Eisenberg（1988）は“Kinship”と名付けている。前原・金城・稲谷（2000）による大学生と高校生の意識調査では，男子は祖父母の続柄による評価の違いを示さなかったのに対し，女子は父方の祖父母よりも母方の祖父母に対して，より高い評価を示し，特に母方祖母の存在に特別な意義を与えていたと報告している。

本邦では古くから，女性が結婚後も実家との結びつきが強い傾向にある。最近では景気の低迷により，若年の親世代が経済的に安定している祖父母世代と結びつく傾向がより顕著であり，特に孫を介して 3 世代が交流し余暇や消費活動を楽しむ際にも，母方の祖父母に偏る傾向（北村，2010）が指摘されている。

本邦にみられる特徴的な自立を，斎藤（2003）は，親元から分離・独立する形式を基本とした，いわゆる欧米的な「個人の自立」は，表向きは尊重されながら，親自身の必要のため子どもを親元に引きとどめようとする傾向もみられ，“本邦の青年に求められている「自立」には「本音と建て前」的な二重構造があり，一貫性に欠ける”と，述べている。

このような傾向や特徴を鑑みると，冒頭挙げた，世代間の関係性の複雑さを，よりスムーズな世代性の「循環」に繋げていくためには，本邦においては特に，母系“Kinship”から世代性を探索する必要性があると推察される。

＜付記＞

本稿は平成 27 年お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座在籍時に執筆した卒業論文の内容を再構成し，大幅に修正・加筆したものである。ご指導を賜りました井原成男教授に厚く御礼申し上げます。

＜謝辞＞

本稿の執筆にあたりご指導いただきました，お茶の水女子大学大学院の篁倫子教授に，厚く御礼申し上げます。

文献

Bradley,C.L. & Marcia,J.E. (1998). Generativity–Stagnation: A five category model. *Journal of Personality*, *66*, 39-64.

Cheng,S.T. (2009). Generativity in later Life :Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological will-being. *Journal of Gerontology, 64* B(1),45-54.

Eisenberg.A.R. (1988). Grandchidren's perspectives on relationships with grandparents : The influence of gender across generations. *Sex Roles, 19,* 205-217.

Erikson,E.H. (1950). *Childhood and society.* New York: W.W.Norton 仁科弥生（訳）(1977). 幼児と社会Ⅰ　みすず書房

Erikson,E.H.(1964). *Insight and responsibility.* New York: W.W.Norton 鑪幹八郎（訳）(1971). 洞察と責任　誠信書房

Erikson,E.H. &Erikson,J.M.(1982). *The life cycle completed.* A REVIEW. NewYork: W.W.Norton. ライフサイクル，その完結(増補版)．村瀬 孝雄・近藤 邦夫（訳）(2001).みすず書房

藤崎 宏子（編）(2000). 親と子――交錯するライフコース――ミネルヴァ書房

樋口 恵子 (2007). 祖母力――娘・嫁・息子を救い孫を守る愛の手 講談社

堀毛 一也 (2008). 成人期のサスティナブルな信念の個人差に関する研究(1) 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集　202-203.

一ノ瀬 節子 (1999). 中高生の母親のカウンセリング教育と医学, *47*(5), 43-49.

北村 安樹子 (2010). 世代間関係にみる「子孝行」と「母系」シフト. *ライフデザインレポート, 194,* 50-52.

鯨岡 峻 (2010).〈育てられる者〉から〈育てる者〉への世代間伝承を考える 人間関係研究, *9*, 129-161.

串崎 幸代 (2005a). E.H. Erikson,のジェネラティヴィティに関する基礎研究――多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して――　心理臨床学研究, *23*(2), 197-208.

串崎 幸代 (2005b). ジェネラティヴィティの感覚と人生に対する態度の関連について 心理臨床学研究, *23*(5), 591-596.

前原 武子・金城 育子・稲谷 ふみ枝 (2000). 続柄の違う祖父母と孫の関係 教育心理学学, *48*(2)120-127.

丸島 令子・渡辺厚子・大石美佳 (1998). 中年期の父親,母親と青年期の娘――親の性役割タイプと相互性について――女性学評論, *12*, 21-44.

丸島 令子 (2000). 中年期の「生殖性(Generativity)」の発達と自己概念との関係性について　教育心理学研究, *48*, 52-62.

丸島 令子 (2005). 世代性尺度の作成――世代性の関心と行動モデルの測定――心理臨床学研究, *23*, 422-433.

丸島 令子・有光興記 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改正版作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, *78*,(3), 303-309.

McAdams,D.P.,& Aubin,E.S.(1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, mehavioral acts, and narrative themes in autobiography.*Journal of Personality and Social Psychology*, *62*(6), 1003-1015.

McAdams,D.P.,& de St. Aubin,E.,&Logan,R.L.(1993) Generavitity among young, midlife and older adults.*psychology and Aging*, *8*(2), 221-230.

西平 直 (2014). エリクソンは発達の「循環」をどう描いたのか 鈴木忠・西平直　生涯発達とライフサイクル 東京大学出版会

西山 直子 (2011). 青年期娘世代からみた「祖母―母―娘」三世代の関係性 : ―― visual narrative としてのイメージ画を通して――京都大学大学院教育学研究科紀要, *57*, 379-392.

岡本 祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発生過程とその要因　風間書房

岡本 祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房

斎藤 環 (2003). ひきこもり文化論　紀伊國屋書店

Strauss A.Corbin J.(1990). *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory,Procedures and Techniques.* Thousand Oaks,CA: Sage.

Sullivan,K.,&Sullivan,A.(1980). Adolescent parent separation.*Developmental Psychology*,*16*,93-99.

田渕 恵 (2010). 世代性(Generativity)の概念と尺度の変遷,生老病死の行動科学, *15*,13-20.

やまだ ようこ (1988). 私をつつむ母なるもの――イメージ画にみる日本文化の心理――　有斐閣